

## 重度失語症者に対する散歩の促し —訪問言語聴覚士の取り組み—

### Training to walking for the serious aphasiac — The approach of a home visit speech therapist —

矢作 満\*

要旨：身体のリハビリテーションを拒否する重度失語症者に対し、散歩を促す介入を行った。症例は80歳代男性。聴覚的理解は高頻度語であっても困難であったが、それに比較して読解は良好で、知的機能と記憶機能には大きな障害がなかった。言語指示のみでは散歩は促せなかった。そこで、散歩する場所を図示した条件、散歩した日はカレンダーにシールをはってもらおうという条件で介入し、散歩を行った回数を比較した。その結果、散歩する場所を図示し、かつ散歩した日はカレンダーにシールをはってもらおうという条件の介入でもっとも散歩回数が多かった。散歩の促しには症例が理解できるように伝えることだけでなく、行動へ移す「しかけ」が必要であった。「しかけ」は個別性が強いと思われ、言語・認知機能だけでなく、性格など包括的に評価してオーダーメイドする必要があると思われる。

**Key Words**：訪問リハビリテーション、重度失語症、生活期、行動変容

#### はじめに

失語症全国実態調査委員会（2002）によると、病院等を受診している失語症者は28054名いるという。また、そのうちの32.3%にあたる9060名は外来患者であり（失語症全国実態調査委員会、2002）、在宅生活をしている失語症者が少ないことを示している。失語症は改善に時間がかかることが知られており（佐野ら、2000）、在宅生活に戻ったあとも言語療法を受けることで改善する可能性がある。しかし、失語症の改善には年齢が大きく関連しており（佐野ら、2000）、失語症者の予後は必ずしも良好とはいえないであろう。そこで言語機能そのものを改善する試み以外にも仲間づくりのリハビリテーション（遠藤、2011）や生活面の改善に対するリハビリテーション（Poundら、2000）が行われている。生活面の改善に対するリハビリテーション（Poundら、2000）では失語症に対し情報を補填することが非常に重要であるという。

今回我々は、身体リハビリテーションを拒否す

る生活期の重度失語症者に対し、情報の補填が行動変化に結びつくような介入を行った。本症例は病前から運動習慣がなかったこともあり、麻痺が軽度であるにも関わらず運動を好まなかった。そこで散歩の習慣化が必要と考え、なぜ散歩する必要があるのか本人に理解できるように伝え、どのように説明したら失語症者に伝わりやすいのか家族に説明を行った。その結果散歩が習慣的に行えるようになったのでその経過を報告する。

#### 1. 症 例

症例は80歳代男性、右利きの左脳出血例である。損傷部位は画像を得ることができなかったため不明である。本例は同年代の妻と二人暮らしをしている。なお、今回の報告にあたり、口頭および書面で説明を行い同意を得た。

**現病歴**：x年y月、脳出血を発症し保存的に治療された。y+3月、回復期病院に転院したがリハ

\*在宅リハビリテーションセンター草加 Yasaku Mitsuru : Home-Visit Rehabilitation Center Soka



身体機能に問題がないにも関わらず、外出を好まず、日中のほとんどを居室でテレビを見て過ごしていた。デイケアで理学療法士のリハビリテーションを受けられる環境であったが、行っていなかった。そのため歩行が可能な機能を持っているにも関わらず、今後それが低下してしまう可能性が大きいと思われた。

## 2. 訓練方針

失語症に対する言語訓練を行いつつ、日常生活動作の維持向上、生活の質の向上を目指し介入することとした。言語訓練では実用コミュニケーション訓練、言語理解訓練、書字訓練、描画訓練などを実施した。日常生活動作の維持向上を目標として散歩の促しを行うこととした。散歩の目標は、本人および妻と相談の上、病前通っていた近隣の理容院まで通うこととした。

## 3. 介入方法

散歩を促すにあたり、散歩をする目的と方法を伝えた。本例は聴覚的理解が大きく障害されていたので、文字を書き伝えることとした。散歩する場所はSTと一緒に歩いて確認し、往復で約80mの車通りの少ない安全な道とした(図2)。そして週に何回散歩を行ったか、歩いた頻度を報告してもらうこととした。また、主介護者である妻から歩行の様子を聴取した。

## 4. 実験デザイン

実験デザインはABA B'A法とした。各時期は4セッションとし、全時期で20セッションとした。A期では前述の介入方法で実施し、妻から散歩回数を報告してもらうこととした。B期では散歩場所の地図を渡した(図2)。B'期ではB期の条件に加え、散歩したらカレンダーにシールをはることとした。なおこの実験は春に実施し、散歩の回



図2 本症例に提示した地図

数に気候の要因が入らないよう留意した。

## 5. 結果

結果は表1、図3の通りとなった。A期では散歩はほとんど行われなかった(平均散歩回数0.25回)。地図のみを渡したB期は若干増加した(平均散歩回数1.5回)。シールをはることでB'期では散歩回数ももっとも増加した(平均散歩回数5.5回)。B'期の後シールを渡さなかったが、妻がシールを用意してしまった。しかしこの介入から2ヵ月後のプローブ期ではシールがないにもかかわらず散歩回数は維持されていた。

妻は本症例の歩行の様子について、A期、B期では「歩けないと困る」「やる気がない」といった趣旨の発言が多かったが、B'期以降は「最近散歩している」「やる気が出た」という趣旨の発言があった。また、「今度理容室まで一緒に行こうかしら」という妻の発言の後、実際に理容店にまで夫婦で出かけ整髪を行ったとのことであった。

## 6. 考察

ベースラインであるA期では、文字を併用し散歩をするように伝えたものの、どこを、どれくらい散歩すればいいのか不明確であった。そのため

表1 各時期の様子

	A 期	B 期	B' 期
教示	「散歩してください」 文字で提示	A 期に加え地図を提示 (散歩場所明記)	地図を提示に加え 歩いたらカレンダーにシールをはる
本人	どうしたらいいのかわからない →行動できない	歩く疲労感あり 達成感なし	歩く疲労感あり 達成感あり (シール貼り) 楽しみあり (シールに関する会話)
妻の意見		「歩けなくなると困っちゃう」 「話してもわからない」 「すぐ忘れちゃう」 「やる気がないのかしら」	「最近散歩してくれるの」 「やる気が出たみたい」 「シールを見て笑ってたわ」 「カレンダーを指さして『おう』って」 「今度理容室まで一緒に行こうかしら」
散歩回数	0.25回/週	1.5回/週	5.5回/週

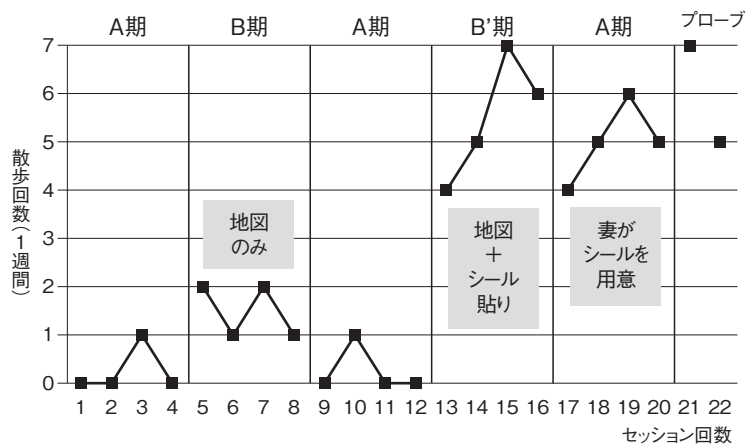


図3 散歩回数

何をしたらいいか十分理解できなかったと思われる。そのため散歩という行動がほとんど出現しなかったと考えられた。そのため介入期であるB期では、どこを、どれくらい散歩すればいいのかわかるといって地図を提示した。地図を提示することで散歩場所は明らかになったが散歩すると疲労感があることや、達成感がないといったマイナスの面が多く、散歩の頻度は増えなかったと考えられた。そこで、散歩に対し達成感を持つようにするという目的で、散歩を行ったらカレンダーにシールをはるという介入に変更した。こ

の期でもB期同様、散歩をすることにより生じる疲労感、というマイナス要因はあるものの、散歩場所は明らかで、しかもシールをはるという対象者自身の達成感やそのシールに対してSTや家族が対象者に話しかけるという楽しみも出現した。シールをはることによって家族やSTといった他者から賞賛される機会が非常に増加し、これにより、対象者のやる気が向上し、散歩の頻度を多く持つことができたのではないかと考えた。

一般的に失語症者には、カレンダーや地図を使うことでコミュニケーションが行いやすくなると

言われている。今回の結果も同様に、地図を用いたことで情報が伝わったように思われるものであった。しかし、伝わった情報をもとになにか行動を起こしてもらうには、「シールをはる」といった「しかけ」が必要であった。我々専門家はコミュニケーション機能を評価し、どのようにしたら失語症者に伝わりやすいのか工夫することはもちろん、性格や好みなどの情報を集め、それらを含めて「しかけ」を工夫し介助者らに伝える必要があると思われた。

## 文 献

- 1) 遠藤尚志：地域での仲間づくり．失語症の理解とケア．雲母書房，東京，2011，pp.76-90.
- 2) 佐野洋子，小嶋知幸，加藤正弘：失語症状の病巣別回復経過の検討．失語症研究，20（4）：311-318，2000.
- 3) 失語症全国実態調査委員会：失語症全国実態調査報告．失語症研究，22（3）：241-256，2002.
- 4) Pound, C., Parr, S., Lindsay, J. : Breaking Down the Barriers. In : Beyond Aphasia. 1st Ed., Speechmark Publishing Ltd, UK, 2000, pp.126-177.